

ライシテの歴史を続ける前に、またしてもパリで起こったテロ事件について、ライシテとの関連で少し考えてみたい。1年の内に起こった2度の事件は同様にテロと呼ばれているが、その内容は若干異なる。1月のテロはシャーリーエブドの記者を狙い、ユダヤ系のスーパー「イーペールカシェール」を狙ったが、今回は前回ほど標的が明確ではなく、無差別に選ばれたような印象も受ける。そして今回は事件後にライシテという言葉が何度か聞かれたが、今回はそうしたターゲットの違いからか、ほぼ耳にしないと言ってもよい。もはやライシテの問題、つまり宗教の問題ではないと捉えられているように思われる。テロ直後の報道番組でフランスの戦争状態をイデオロギー戦争という表現を使って説明するコメンテーターもいたが、オランダ大統領は「敵はイスラム国」と明言している。つまりイスラム教の教えから派生する思想ではなく、一つの国（あるいは集団）が敵であるとしているのである。

また今回のテロの実行犯アブデスラム兄弟は、ブリュッセル郊外の出身で、バーを営んでいたという。酒を飲み、麻薬も吸い、いわゆるごろつきと呼ばれる若者だったそうだ。イスラムの教えを信奉している様子もなかった。またパリ郊外のサンドニでフランス特殊部隊の急襲にあつて死んだ女性に関しても同様、昔から信仰熱心であったとは聞かない。1月のテロでは、犠牲になった側のシャーリーエブドの挑発的な風刺画に対する批判的な論調も見られ、宗教とは何か、表現の自由とは何かという議論が交わされた。しかし、今回の事件は市民レベルで一部反イスラム的な反動が見られるとはいえ、イスラム国に傾倒する若者に信仰がないという点も注目され、宗教的、イデオロギー的な問題はあまり前面に出てきていないように思われる。

したがって、今回のテロに関してはライシテは問題視されず、政治的な側面が強調されることになるであろう。しかしながら、フランス共和国と国内のイスラム教徒の関係において重要な局面を迎える可能性はある。それはつまりイスラムのフランス化がいよいよ本格的に進むかどうか、という点だ。言い換えれば、フランスに住むイスラム教徒がイスラム法や母国の慣習を差し置いて、少なくともフランスに居住する限りはフランス的共和国精神とライシテを優先できるかどうか、とも言える。つまりフランスのイスラムは様々な努力を繰り返してはいるが、いまだライシテを受容できているとは言い難いと言っても良いであろう⁽¹⁾。イスラムフランス評議会 (Conseil français du culte musulman) は11月19日にフランス各地のモスクに宛てた文書で、イスラム教はテロリストとは異なり、友愛と平和の精神を教えているとし、かつフランス国民としての連帯を強調している⁽²⁾。また評議会に参加していないフランスイスラム連合 (Union des Organisations Islamiques de France) においても、過激な思想やイスラムの教えに相反する言動が見受けられれば積極的に告発するように呼びかけている。そのUOIF連合の祈りの集いで、ある女性は「私たちの側に過激派がいると認めるのは初めてだ」と述べているが、いよいよフランス国内の穏健なイスラム信者たちの中で、自分たちのコミュニティに危険分子が存在しうることを公に認め、同じイスラム教徒であっても

過激派を積極的に否定し排除しようとする風潮が主流になるような動きも見え隠れしている。リヨン郊外のどちらかと言えば治安の不安定なヴェニッシュュー市のある熱心なイスラム教徒が「モスクに通う我々が過激派を追い出すべきだ」とフェイスブック上のビデオメッセージで訴えかけ、570万人がそれを視聴しているともいう⁽³⁾。

このように、今回のテロ事件がフランスのライシテ史に残す影響は少なくないようにも思えるが、その検証はしばらく時を待たねばならないだろう。

ライシテの歴史から脱線したが、話を戻したい。前回、16世紀の宗教改革前夜までを大まかに通観した。その次の時代へ入る前に、カトリック信者の中で今でも根強い人気を誇るアッシジのフランシスコと「リヨンの貧者」の創設者であるヴァルデス (ヴォデスやピエール・ヴァルドとも呼ばれる) に少しだけ触れてみたい。このほぼ同時代 (12世紀末から13世紀初頭) の二人は、富裕層の出自であるが後に清貧を貫き、人々が理解できる現地語で宣教活動を行うなど、共通点も多いと言われることが多い⁽⁴⁾。フランシスコに至っては動物に説諭を加えたことでも知られる。ヴァルデスは今ではイタリア、フランスにまたがる地域に一部残るヴァルド派 (またはワルドー派) の祖である。しかし、前者が現法王の名に冠されるほどカトリック信者に愛されているのに対し、後者は異端扱いで弾圧を加えられプロテスタントへの道を辿らざるを得なくなった。その主因の一つは当時司祭以外には禁じられていた説法活動であった。「リヨンの貧者たち」はリヨンを追い出されただけでなく、虐殺も含めその迫害は長きにわたって熾烈を極めたい。今年に入って、法王フランシスコがヴァルド派に謝罪を行ったこともニュースになった⁽⁵⁾。しかし、聖フランシスコも司祭ではない。共通点の多い二人が正反対の道を辿ったのは、そういった理由以上に教会組織に由来する問題と言える。つまり教会が認めたかどうか、あるいは教会に従うかどうか、という問題である。この程度の比較で結論付ける危険と極論を顧みず言えば、当時は信教の自由がなかっただけではなく、政治的要素を強く含有する教会権威に逆らうことができず、信仰の自由すらなかったと言えるかもしれない。教会組織イコール信仰であり、教会に従わなければ、社会から抹殺されるのである。そこには中世のキリスト教が我が世を謳歌した時代の、宗教的に閉塞した空気が読み取れる。聖フランシスコがカトリック世界で今なお光輝くのも、その存在が社会秩序でもあった宗教規範を著しく逸脱した例外中の例外であるからかもしれない。

[註]

- (1) 谷川稔、『十字架と三色旗』、岩波書店、2015、272～276頁
- (2) <http://www.la-croix.com/Religion/Actualite/Texte-du-CFCM-a-precher-dans-les-mosques-vendredi-20-novembre-2015-11-19-1382332>
- (3) <http://www.leprogres.fr/rhone/2015/11/20/le-recteur-de-la-mosquee-de-villeurbanne-juge-la-denonciation-des-extremistes-conforme-a-l-islam>
- (4) Pouzet Philippe, *Les origines lyonnaises de la secte des Vaudois*, Revue d'histoire de l'Église de France, tome 22, n°94, 1936, pp. 5-37. De Turckheim Geoffroy, *Le protestantisme*, Paris, Eyrolles, 2011.
- (5) <http://www.lefigaro.fr/flash-actu/2015/06/22/97001-20150622FILWWW00063-le-pape-demande-pardon-aux-vaudois.php>